



Title	「水」が持つ価値とは何か : 第12回有識者インタビュー : 沖大幹氏
Author(s)	村上, 道夫; 乃田, 啓吾
Citation	水道公論. 2026, 62(3), p. 21-28
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/104314
rights	日本水道新聞社提供
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「水」が持つ価値とは何か

―第12回有識者インタビュー― 沖大幹氏―

インタビュー、原稿執筆：村上道夫（大阪大学感染症総合教育研究拠点教授）

インタビュー：乃田啓吾（東京大学大学院農学生命科学研究科准教授）

インタビュー：沖大幹（東京大学大学院工学系研究科教授）

私たちが大切にし、誇りに思う

ような「水が持つ価値」とは何か。

そのような素朴な問いを水に関連する様々な分野の有識者に尋ね、

2024年5月以降、隔月で紹介してきた本企画もいよいよ最終回を迎える。本回では、水文学者として地球規模での水循環と水利用

を融合した研究分野を開拓し、地域から世界の様々な水問題に俯瞰的な見識を持つ沖大幹氏に、「水が持つ価値」に関する考えを尋ねた。

沖大幹氏の経歴

沖氏は1964年に東京都に生まれ、兵庫県西宮市に育つ。1989年に東京大学大学院工学系研究科修士課程修了後、博士後期課

程を中退し、同年から東京大学生産研究所助手を務める。1993

年に博士（工学）を取得し、1995年同学講師、1997年助教

授、2002年に総合地球環境学研究所助教授、2003年東京大学准教授を務めた後、2006年

より同学教授に着任し、2020年より現職。2016年から2021年の間は、国際連合大学上級

副学長、国際連合事務次長補も務めた。2008年に日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を、

2024年には、ストックホルム水大賞と紫綬褒章を受賞・受章した。専門は水文学。水文・水資源学会長などを歴任した。著書に『水

危機 ほんとうの話』、『東大教授』、

『水の未来―グローバルリスクと日本』など多数。

2024年ストックホルム水大賞までの研究活動や経歴については、「水文・水資源学会誌」37巻3号（2024年8月号）に掲載された記念寄稿に詳しい。また、同賞の受賞後のインタビューでは、雑誌「河川」の944号（2025年3月号）でも、受賞に至るまでの沖氏の研究スタイルや物事の捉え方が紹介されている。

次のインタビューは、沖氏が水に関する分野に入った当初から『水危機 ほんとうの話』を執筆された頃までの水への価値観の変化について尋ねたものである。

水分野に入ったきっかけ

村上 水に関連する分野に入ったきっかけからお伺いします。じゃんけんや河川研に入ったと聞きかけたことがありますか、あらためて水に関連する分野に入ったきっかけを教えてくださいませんか。

沖 土木工学科に進学した決手は、選択可能な中で、文系と理系の両方の学問ができそうだったからです。それは非常に大きな魅力でした。今でもそうだと思います。けれど日本では高校で大学受験を考える際に、文系か理系かを選ばなければいけませんよね。僕は高3になるときに、どっちがいいかなと本当に悩んでいました。父

親から文系の学問は後からでも勉強できるけど、理系の数学とか物理とかはやっぱ若いときでないとなかなか難しいから、迷ったらそっちを先にやれと言われて、そうしようかと思いました。

大学の研究室は4年生になるときに決めなければいけなくて、研究室選びのガイダンスの際に当時の交通研究室の先生が、人間行動のニュートンの法則を見つけないだと言っていたわけですね。今にして思うと、まだ行動経済学という名前もなかったころだけれども、そういう行動選択の理論みたいなものをつくろうとしていて、そういうのがエンジニアリングでも議論され始めていた頃だったのだと思います。これこそが僕がやりたかったと感じ、ぜひ交通研究室に行きたいと思ったんですが、定員5名のところ希望者が6名いて、談合で決まらなかったのじゃけんをして負けたので、行ける研究室は水しかなかったんです。ただ、水でもいいかなと思った理由は、3年生のときに、広島の当時の建設省太田川河川工事事務所に1カ月間、実習で行って、キネマ

ティックウエーブによる都市化によって洪水が激化するというシミュレーションをやったんです。『水理公式集』に書いてあった、BASICのコードをFORTRANに焼き直して、当時ミニコンと言われるもので走らせて、都市化を想定してマンダラの粗度係数を小さくしたら、同じ雨でも都市化前に比べてちゃんと河川流量のピークが立ち上がったんですよ。これは面白いなと思いました。

村上 当時からコンピューターが大好きだったんですね。

沖 大学に入って、勉強しなくて何していたかというところ、計算機です。当時マイコンと言っていたのを買ってもらって、ゲームして遊んでいました。そういう意味では、案外一貫していて、計算機でいいかなという感じですね。

村上 それで河川研に入ったわけですね。

沖 実はじゃんけんか負けた後には水理学の研究室しか空いてなかったんです。気を悪くする方もいるかもしれませんが、水理学の様なすでに何十年前も前に出

来上がった力学の体系に僕はあまり関心がありませんでした。それで、河川研に進学が決まっていた同級生（高校の先輩）に、自分は修士に行くつもりだから代わってほしいと頼んだら、「ええよ」と言ってくれたわけです。

村上 それは大きくその後が変わった瞬間ですね。修士から交通研に行くというのは考えなかったんですか。

沖 考えなかったですね。卒論で、僕は雨の数値シミュレーションをやるつもりでしたが、ちゃんとした結果が出なかったんです。水蒸気モデルへの組み込みすらできなくて、やっぱり悔しかったので、ちゃんと結果を出したいと思ったんです。それに、どんな学問でもやり始めたなら何でも面白いのではないのでしょうか。

村上 雨の数値シミュレーションについて詳しくお聞きしてよいでしょうか。

沖 卒論のときには二次元、修士のときには三次元にした解析をしました。でも、僕の周りに気象の人はいなくて、雲過程を入れることができませんでした。でも上

昇流が起こるところでは雲が起る、という想定で、豪雨分布の様な図を描きました。そのシミュレーション結果が、当時利用可能になり始めた気象庁アメダスのデータを用いて作成した豪雨時の分布にどのくらい対応しているかを比較したわけです。

村上 それは対象でいうと日本でしょうか。

沖 日本全国を対象にしました。村上 だいたいどのぐらいのメッシュサイズだったんですか。

沖 メッシュ、覚えてないですね。（当時の図案を取り出して）10⁵くらいですね。風向を変えたときに、どこが上昇領域になるかみたいな計算をしました。それを日本語の論文にまとめて投稿したのが、修士2年の時です。そういう経緯もあって指導教官の虫明功臣先生が筑波の土木研究所の吉野文雄さんという降水レーダーの専門家のところに修士の間、丁稚奉公みたくに行かせてくださったんです。今で言うインターンですね。

村上 修士に行くまでは、修士を修了した後は就職を考えられて

いたのですよね。

沖 修士になつたところに、助手のポストがはずれ空くので、取りあえずは博士課程に進学しないかと、虫明先生におっしゃっていたんだいんです。ただ、当時は年間予算が運営費交付金200万円だけとか、そういう時代だったんですね。ところが、その修士の間に通わせてもらった土木研究所とかだと、1人2億円とかの予算が使えていたのです。やっぱり機械や測定器も大事なので、国の研究機関へ行くとか何か先端的な研究ができるのではないかとあれこれ想像してだいぶ悩みました。

僕は先祖が九州で、祖父母を訪ねた折に太宰府の奥の山をずっと歩いて悩んだ挙句、決め方を決めようと考えました。役所に入って偉くなるのも、大学に行って偉くなるのも、どっちもうまくいけば、それぞれ違う軸で楽しいだろうなと。だから、そういう観点では決められないと。上手いかなかったときにマシな方にしようと考えたわけです。役所でうまくいかなかったら、何か満たされず無念を晴らしながら、過ごすんじゃない

かと思いました。ところが、大学ではうまくいかなかったら、少なくとも幸せな読書人生が送れるかな、と。今にして思えば当時はよく分かってなかったと感嘆しますが、結果オーライとして、そういう思考の結果、大学の方がはるかにマシであると決断しました。

村上 マキシミン原則ですね。

沖 当時、『アスキー』という計算機の月刊誌をずっと読んでいたんですが、オセロといったゲームの計算機側のアルゴリズムを考える際の1つのやり方として知っていました。

村上 その後はどのようなことをされたのですか。

沖 修士のころ、当時の気象学教室の勉強会に参加させてもらってそこで大気水収支法の話の聞いたんですね。こういう研究が自分でもできたら面白いなと思ったのですが、日本の河川流域はサイズが小さすぎてちょっと難しそうだとあきらめていました。その後、博士課程1年を中退して助手にしていた直後に、筑波大学の椎貝博美先生の海外調査に加えてもらって、タイに行ったんですね。

そこで、タイのチャオプラヤ川の様子に利根川の10倍の流域面積があれば大気水収支法が適用できるのではないかと、思いついて挑戦しました。これがグローバルな水循環の研究を始めるきっかけでした。その後は、タイの水収支について、水蒸気の収束や発散を読み取って、図示して、ということをしていました。助手だったので、給料をもらいながら研究しました。

村上 その後は、「水文・水資源学会誌」に掲載されたストックホルム水大賞受賞の記念寄稿に詳しく書かれていますね。

沖 大気大循環モデル(GCM)

に関する研究を進めた後、アメリカに行つて、熱帯降雨観測衛星(TRM)のデータを用いて、グローバルな雨の分布を用いた解析をしようとして日本学術振興会の海外特別研究員に応募しました。採用されてアメリカに行つたら、河川流量のシミュレーションの方が面白いかなと思つたわけです。

村上 人の活動が入っていたのは、どのあたりですか。

沖 2001年に修士課程に進学した花崎直太さん(現・国立環

境研究所気候変動適応センター室長)が、ダムを入れたシミュレーションを始めたのが最初です。それまでは、自然状況における河川流量を再現して、逆推定することで、ダムの貯留量をシミュレーションするというのが王道でした。やっぱり、人の動きをシミュレーションした方が面白いと思つたんです。実際に観察されるのは、人の手が入った流量ですから。人の活動を入れなきゃいけないだろうと思つたわけです。

Scienceでの論文掲載と水への価値観

村上 2006年には、Scienceに掲載された地球上の水循環量と貯留量の図として示されていますが、このような図を作ろうと着想したのは、いつごろだったのでしょうか。

沖 それは卒論をしていたころですね。地球の気候システム、という概念図に、水循環をきちんと要素として入れて、できれば数字も入れられると良いと思つていました。

村上 もともとそういう図を作

ろうと考えていたけれども、一直線でそのような研究を行ったというよりは、研究を進めていくうちに、必要な要素が追加されていったという感じですね。

沖 そうですね。さらに自然と人間活動を両方考慮していくことに進みました。

村上 では、研究を始めてからダムの貯留量を考慮するようになったところまでの間に、重視していた事柄についてお伺いします。どういったことに研究の重点を置いていたのでしょうか。

沖 定量的に算出しようとしていましたね。できれば精密に。例えば、地球って本当は丸い球ではないですよ。この形状を考慮すると、グローバルな平均降水量も数%くらい変わります。そういうことにはこだわりましたね。今、考えると、だからどうしたという感じはしなくもないんですが。

村上 役立つかどうかといった視点は大事にされていたんですか。

沖 やはりエンジニアリングなものと、長くお世話になった生産技術研究所では社会というか、企業の生産活動に直結するような研究

が非常に奨励されていたので、自分の研究はそうではないなという引け目はずっとありましたね。ただ、僕は水の量と分布を知りたかったんです。どこでどれくらい雨が降るかというのが好きだったんです。観測すればいいと思うかもしれないけれど、30年前には、グローバルに水循環を観測する人工衛星などの手段も整っていませんでした。

僕は基本的には雨が好きなんです。資源としての水について本気でかかわるようになったのは、グローバルな水循環を始めた2000年の第2回の世界水フォーラムのころですね。そういう会議の場で議論されていることを聞いて、違う、と思うわけです。そういう意味では大事にしているのは論理ですね。

乃田 違う、というのは何と何がですか。

沖 例えば水が足りなくなるって、雨が足りないからとかではないと思うわけです。

村上 アカデミアの場で示される論理が未熟であることを感じて、違う、と思ったということですね。

それに対して自分はきちんと論理を示したい、と考えたということでしょうか。

沖 Science の論文は、あの図も有名ですが、やはり一番重要なのは、水が不足する原因は時空間的な偏在にあり、それを平準化するためのインフラや仕組みがないといけないという当たり前のことが明記してある点です。

村上 沖先生が示されてきた、水の単価と市場規模やバーチャルウォーターも、時空間的な偏在と水の不足の関連性についての議論ですね。

沖 そうです。実は水の単価と市場規模の図ができたのは父親の影響が大きいのです。銀行員なので、単価を気にするんですね。

乃田 先ほどの、違う、というときに、何でその人たちは違うことを言っているんだらうと考えますか。その人たちが違うことを言っている理由です。

沖 はい、もちろんです。研究論文にはありませんが、科学技術社会論や行動経済学はそれなりに勉強し、人が非論理的、非科学的な見解を表する理由をだいたい理解

しまして。でも、今でも、「地球上には水はたくさんあるように見えるけれども、淡水は0.01%だから貴重なんですよ」という説明を聞くと、みんな納得してしまうわけです。確かに0.01%は少ないよねというところで思考が止まって、0.01%でも十分かどうかとは考えない。例えば、「私の金融資産は、日本の個人の金融資産の0.01%から貴重なんです」と言われても納得感が低いわけですが、このように批判的には考えない。人が言ったら、それをそのまま受け売りする人が多いからかもしれないですね。僕はそういう意識をまず疑ってかかります。逆に、普通はもつと皆さん素直に他人の発言をそのまま信じるでしょうね。

村上 では、当時、水に関連すること、守りたいと考えていたことは何でしょうか。守りたいこととは、人の健康とか安全や経済、生態系など、いわゆるアウトカムとか目標のことを指しています。

沖 僕が雨の研究をしようと思ったのは、やっぱり洪水の予警報をもっと良くして、人の命が失

われないようになるといういなと
思ったからです。

村上 洪水によって失われかねない人の命ということですね。

沖 そうです。

村上 そういう意味では、経済影響についてはいかがでしょうか。

沖 経済影響はあんまり考えていませんでした。やっぱり人の命ですね。予警報が良くなっても経済的な価値はあまり防げません。予警報が良くなると人は逃げられますが、財産を守るためにできるのは貯水池の事前放流や貯留ぐら
いと限られています。

村上 非常にシンプルですね。

沖 最初は、ですね。その後は面白いから研究していたんですね。

村上 水の遍在性については、経済性ともかかわりますが、いかがですか。

沖 それは、みんなどうも分かっていない様なので、僕がこうだろうと考えた理由をちゃんと説明しようと思ったからです。

村上 経済性を大事にしているからというよりは、経済性という理由を示したということですね。それでは、偏在という点では、公

平性などについてはいかがでしょうか。

沖 例えば、貧しい人に、安全な水が行き渡るように、といった話ですね。それを言い出すと、何でも不平等ですよ。水だけではなくて。

村上 治水に関する公平性もあります。

沖 それに関しては、水の問題というよりは、貧困撲滅とか、やっぱりそのコミュニティー、個人というより、コミュニティー全体の基本が豊かになるのが大事だと僕は思っています。ちなみに豊かになったから水も使えるようになるというのが本当のところ、あんまり根拠なく、水へのアクセスの増大は、地域の豊かさも増しますみたいな話も言っていたりしましたけど、根拠は弱いですね。

村上 では、先生が卒論を始めから2000年代前半ごろまで、日本で水に関連して良いと思うこと、誇りに思うことはありましたか。

沖 当時は、まず社会的背景は長良川河口堰ですね。1995年に稼働が始まって、その後も反対

運動がずっと続きました。小貝川の洪水が1986年で、長崎豪雨は1982年ですね。その後、しばらく2000年の東海豪雨まではあまり深刻な大雨がありませんでした。ですから、当時の建設省河川局も、治水はある程度安全になったので、これからは河川環境だという意識で、1997年に河川法を改正しました。そういう意味では、河川のローカルな生き物に悪影響を及ぼさないような治水や河川管理が考えられていました。それは誇らしい状況だったのではないのでしょうか。

あるいは、社会的には、大阪の水道でオゾン処理が始まったのが1990年代です。すこしずつ味が良くなっていたんじゃないかな、とは思いますが。ただ、当時は、自分自身はとにかく研究室にこもって計算機をいじっていたので、水環境についてはあまり考えてなかったですね。

「水危機ほんとうの話」執筆と水への価値観

村上 そんな水のことを考えてなかったという沖先生が、201

2年に『水危機ほんとうの話』という本を執筆されたわけですから、この本を執筆された理由を教えてください。

沖 編集者の方に依頼されたのがきっかけです。今にして思うと、Scienceの論文に2ページ半で書いた内容を200ページ以上で説明した、と言ってよいと思います。

村上 今、振り返って読んでみると、パーチャルウォーターやいわゆる水ビジネスの話がかなり厚めに書いてあるという印象を持ちました。

沖 パーチャルウォーターもまとめておかなければという気持ちですね。水資源の偏在性という話とパーチャルウォーターは切っても切り離せません。ですが、人生を振り返ったときに、パーチャルウォーターの沖と言われて、それがやっぱり嫌だったんですね。パーチャルウォーターだけで終わりがたくないと思ったんです。2004年から2006年までに何本かパーチャルウォーターの論文を出しましたが、それ以来はあんまり出していません。なぜかという

と、やっぱり、まあ、ここから先は不要と考えたんですね。

村上 『水危機 ほんとうの話』では、Scienceの論文の内容をしっかりと書かれています。いろいろと当時のニーズというか、パーチャルウォーターを1回まとめなければということがあったわけですね。その他に、水ビジネスの話とかもだいたい書かれておられます。

沖 そうですね。水ビジネスについても、やっぱりどう考えても儲からないと思ったのです。甘い話ではない、という当たり前の話を書きたかった。

村上 それこそ、巷で言われている話について、きっちりと論理立てて書くということですね。

沖 そうですね。日本の水源林が外国資本に狙われているなど、みんながちらつと斜めにタイトルだけ見た記事で分かった気になった課題について、僕はこういう考えがまっとうだと思うよというのをちゃんと書きたかったんです。

村上 その意味では、冒頭で四大文明の話から始まるというのは印象的ですね。

沖 やっぱり、水が得られるから大河のほとりで文明が生まれた、という説明は素材すぎると思いませんか。そういうネタをずつとためていた、書き残したかったというところもあります。

村上 みんな何となくそう思っているかもしれないけど、本当はこうだよということを、一貫して本の中で書こうという気持ちはあったんですか。

沖 そうですね。僕の人生のモットーは何ですかと言われたら、「目からうろこ」です。

村上 なるほど(笑)。では、そのときに重視した事柄は何ですか、というのが次の質問だったのですが、「目からうろこ」になるわけですね。

沖 そうですね。「水危機 ほんとうの話」も最初は、水文学の教科書にしたかったんですね。僕の問題意識とか、目からうろこで、僕が習った内容と現実が違うよなと思う点をちゃんと漏らさず書くこと、思っているわけです。執筆中は、いろいろな人と話をしたりしたときに、あ、この人、こんなこともわりと素朴に理解しちゃって

いる、というのに気付いたらメモを取って、書き加えるという作業を繰り返しました。

ちなみに、あともう1つのモットーは、「つまらない授業はしない」です。学生の時、本当に授業がつまらなかつたんです。ついでに申し上げると、やっぱり人によつて自分が受けたつらい仕打ち

は次の世代にも同じ仕打ちをしようという人と、自分がつらかつたから次の世代には決してそういう体験はさせまいとする人、二通りに分かれる気がします。僕は良かった体験はそのまま継承したいと努力しますし、悪かつた体験は継承しないように心がけています。

村上 『水危機 ほんとうの話』は授業ではありませんが、つまらない話は書かずに、「面白い話を書こう」と思われたのですか。

沖 そこがまた難しいのは、どうしても読者として、偉い先生とか仲間とかの顔が浮かぶので、案外、難しい内容を書いていますね。それが年を取った先生でないと本が面白くないという理由かなと最近思うようになりました。若いときはそんな当たり前の話を書

いてどうするんだと言われるのが怖いから、つい難しい話を書いてしまいます。だけど、本当に何も知らない親戚に説明する様なつもりで本は書かないと一般には売れないですね。

村上 性格と言われたらそれまでもかもしれないですが、なぜ「目からうろこ」にこだわるのですか。

沖 ひねくれているからじゃないですかね。：読書をしていて、やっぱり自分の常識がひっくり返される快感があるじゃないですか。僕はそれが読書の楽しみだったんです。あるいは、自分が疑問に思わなかつた現実が、実は当たり前ではないという発見も大事です。

村上 本を書くって多くの方に問い掛けるということですよ。自分の中でクリアすることと、自分の中でクリアした話を皆さんに提供するということでは、意味が違いますよね。

沖 それはエンターテインメントだと自分では思っています。自分が面白いと思っているから、ほかの人も面白がつてくれるといいな、と。

村上 この書籍が刊行されたのは、Scienceの論文から6年しかたつてないんですが、書かれている内容はとても幅広いですね。水についての俯瞰性が顕著ですが、当時、守りたいと思ったことは何だったのでしょうか。

沖 水に関連して何を守りたいと思っていたかという意味でいうと、やっぱり治水についてどう考えればいいのか、という点でしょうね。治水の合理的について、地域での治水の歴史的秩序が形成されているという実態。それは不文律で、ある意味では不公平や不平等が残っているんですね。だけど、それを急に平等にしてしまうのはむしろ良くなくて、すべての土地をすべての洪水から守るのは不可能であるという前提で、様々なトレードオフをどう解決あるいは妥協すればいいか考えながら、流域の水を管理していかなければいけないと思って書いていました。

村上 合理的ということについてもう少し掘り下げると、例えば、費用に対して救える命は限られていてみたいなことが挙げられます。沖 やっぱり防災って、投資の

わりには救える命の数が少ないんですね。それをどう考えればいいのかというところ、やっぱり無念さだと思っただけです。無念さを減らすために過大な防災投資をしている、という現実をもう少し共有した方がいいんじゃないかと僕は思っています。

村上 ただ、合理的にとると、その無念さの中でもどこか程度があるという話になりますよね。費用対効果が悪い部分があるかもしれないが、とはいえ、このラインがという。

沖 そうです。そのラインは、ある意味でいうと科学的に、科学性で決まる話ではなくて、やっぱり社会的な共有された合意ラインのようなものです。

村上 それは歴史的秩序に関連するのでしょうか。

沖 歴史的秩序は、もうすこし別の話ですね。従来住んでいて優先される場所と、後から住み始めて優先されにくい場所が本来あるのに、それを無視した都市開発をすると、あるときそのリスクが顕在化してしまう。歴史的秩序を守り続ける必要はないけれども、理

解した上で、どういう解決策が今後にとつてプラスかを、それぞれ経済的な面、社会的な面、それから人口も減るし、あるいは必要な土地面積、農地も住宅地も減る状況下で、どんな対応をするのかと決めるべきで、被害が出たから早速何とかしてというのは間違っていると思います。

それに、洪水や水害って頻度が低いんですね。毎年どこかでは起こるけれども、深刻な水害はごく頻度が低いので、それに対して万全な体制をどこもかしこも取るというのは、とてもではないですがやりきれないですね。

そういう矛盾をまず社会的に共有した方がいいのに、明治時代以降の治水は、どちらかというと、政府が防災をします、任せてくださいという態度ですよ。でも、それはとても大変だという気がします。防災の推進はすべてに優先して正義であるというふうに防災の専門家が考えるのも、僕は間違っているように思います。

地球環境問題がなぜ残っているかというところ、トレードオフがあつて、その社会的合意が難しいか

らですよ。やっぱり残っている問題って、こうすればいいとわかっていて単純な話ではないですね。その構図をみんなで見ることが大事です。

村上 では、2010年代ぐらいで当時、日本に水に関連して良いと思うこと、誇りに思うことは何でしょうか。

沖 地下水の保全に関する条例が増えましたね。また、2014年に水循環基本法ができました。地下水の公共的性格が言われ始めて、注目が集まったんですね。本来は権限のない国土交通省の水管理・国土保全局も、水源林や地下水に注意を払うようになったというのが、大きな変化かと思っています。

村上 お話を振り返りますと、最初は洪水で脅かされる人の命を守りたいということだったものから、合理性と無念さを踏まえて、歴史的な不文律を理解した上で守りたいというふうに少し変わったような印象があります。

沖 安全な水へのアクセスがない人たちは水くみをして大変だ、というだけではなく、安全な水へのアクセスがないところでは、

エネルギーも食料もシエルトも交通も通信もないのです。2010年にマリーに10日間ぐらい滞在していたときの経験が強烈で、それで、少なくとも自分自身の理解がすごく進んだ気がします。そのころから、水は中心に考えていたのですが、水だけが良くなるということはありません、やっぱり貧困撲滅の一環として、水、エネルギー、食料、健康、いろいろな要素の全体的な改善が必要だな、という風にしみじみ思ったんです。

村上 それは守りたいことの拡大ですね。それは、先生の活動によって考えが変わったともいえませんが、逆に、考えによって活動が変わったことはありますか。

沖 僕の研究が、先ほど挙げたような守りたいと思う点に対して直接役立つわけではないんですが、MDGにおける水関連の指標達成についても関心を持つようになつて、水問題の解決にも経済成長が大事だという結果を示す研究をできましたね。それが分かっていたから何かすぐに役に立つわけじゃないという引け目はありますが。

村上 それでは最後の質問です。

今先生が40代前後だったなら何をしますか。

沖 今は大変ですよ。僕らの頃は、計算機を使ったらそれでなんとか恰好がつく研究というか、少なくとも誰もそれまでできなかった研究ができた、といった側面もありました。モデルも今となつては陳腐ですが当時は自分でコーディングして楽しめましたけど、今はもう蓄積がそれぞれありますからね。新しい学問分野を開關できるかという点と難しいかと思えます。

村上 ということは、新しい学問を開きたいということなんです。ね。

沖 僕はそうですね。え、みんなそうじゃないですか。

村上 いえ。新しい学術体系を開きたいという人はそんなに多くはないと思います。

沖 僕は働き者ではないので、少しの努力で何らかの結果が得られるってやっぱりブルーオーシャンしかないですから(笑)。

今40代前後だったらしたいことは、そういう意味では、今すぐは思い付かないですが、そうですね、

人類学で世界の民族の形成過程を研究するか、言語学で世界の各言語について最初はどうだったのか、どう分派したのかといった研究ですかね。でも水文学が良かったのは、やっぱりいろいろな融通が利くし、純粋理学的な研究から応用的な研究までカバーしている点です。理系と文系の間でいる点という夢もかなえられました。

まとめ

沖氏のインタビューから抽出された水への価値観(水について守りたいと思うことや誇りに思えるようなこと)は次のとおりである。

● 洪水から人の命を守りたい。

● 人の命が奪われるという無念さを社会的な共有された合意の中で減らしていく。

● 歴史的秩序を理解した上で、経済的な面、社会的な面、人口や土地利用の変化を踏まえて、人の命を守るための治水のあり方を考える。

● 水問題だけが解決するというのではなく、水、エネルギー、食料、健康などが一体となってコミュニティ全体が良くなっていく必要がある。

付記

本インタビュー企画は、大阪大学感染症総合教育研究拠点の研究倫理審査委員会の承認を得て、村上道夫(大阪大学)、中村晋一郎(名古屋大学)、乃田啓吾(東京大学)によって行われた(承認番号2023 CREER-1212)。クリタ水・環境科学振興財団(水や水環境分野における研究者のネットワーク)の構築を支援するための助成)を受けて実施された。ここに謝意を示す。